

地球村ビジョン策定委員会（第3回）議事概要

日時： 令和元年 11 月 28 日(木)16:00～17:30

場所： ホテルルポール麹町B 1 F レスカル

- 次第： 1 開会
2 議事 地球村創生ビジョンについて
 (1) 資料説明
 (2) 意見交換
3 その他
4 閉会

概要： 次第に沿って、資料説明、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

- 前半に、地球村と具体的に創生するための施策、後半に「地球プロジェクト」の第1号として ILC を位置づける関係をもう少し明確に書いたほうがいいのか。
- 地球プロジェクトと具体的施策の関係についてももう少し言及があってもいい。
- グリーン ILC のように、ILC に取り組んでいくと、ILC そのものの科学的探求からどんどん派生して、地球が今抱えているいろいろな課題につながっていくような部分をもっと強調したほうがいいのか。
- ILC と地球村がどこでどうつながっていくって、それがどういうふうに関係性とか連関性をもっているのかということストレートに見せる。
- プロジェクトエンジニアリングという発想から、実行計画をイメージしたときに、もっとわかりやすく、切り口のはっきりした展開を見せておく必要がある。
- ビジョンを実現していくためには、最低1兆円プロジェクトだと考えたほうがいいのかの構想力がないと、多分展開できないだろう。住んで、食と農から、環境から、あらゆる問題について、1つのチャレンジングなプロジェクトがここにあるというイメージを描ききる。その躍動感が重要。
- ワシントンD.C.の周りを取り巻いているような、IT革命のフロントラインにいる人々や、ボストンの生命科学の研究者が惹きつけるのは容易ではない。つまり、生身の人間として生活に関してものすごくハイエンドなニーズがある。
- どういう国土の形をつくっていくかを考えたときに、地球システムを国土の中に組み込むぐらいのことをやらなければ、日本の国際的な発展性はないのではないか。
- ILC は科学史の発展の中の1つの大きなターニングポイントというか、金字塔になるプロジェクト。

- 国土計画の中で、地球システムを日本の国土の中にむしろ取り込んでいくことによって、日本は新しい発展をしていくのだということでない、うまく行かないのではないか。
- 世界情勢と地球的課題で、気候変動のような話を書いて、一方で、日本の自然観とか社会観とかがあって、その中で日本から世界に提言する、だから日本につくる意味があるのだというほうが、頭にすんなり入る。
- ILCでこういうものがあるともっと行きたくなると、そこはまだここに書いていないのですが、それはこれから以降、今後の続編のところを、また委員会の続編みたいなことで考えていく。そこはいろいろやりようがある。
- 地球村ができてさまざまな人が集まることがおもしろい。
- ILCと地球村という2つの全く違った素材を結びつけて、地場の工作機械メーカーとか、試薬メーカーがピタッとくっつくイメージが出てくると、戦術が組み立てられる。
- 国際的研究組織の中では、ソフィア・アンティポリスが一番田舎っぽく、地域も大きいし、いろいろな業種が入っている。世界でもすばらしいリアス式の地形に、洒落たクルーザーがあると雰囲気がある。そこまでパークウェイで山から降りてくる。比叡山から京都へ行って遊びをするような、そういう雰囲気をつくる。
- 地球村と里山、里海が一番くっつきやすい。里山とか里海を英語にして、その現場を日本人がつくっているから見に来いといえ、今の地球環境の話で、ILCとは距離をおいても、話題になる。
- ILCをやるなら、長崎の五島列島の福江空港ぐらいの空港をつくっておく。滑走路は1,200mぐらいあればいい。
- 例えばキャンパス・アジアの次のステップの展開のときに、こういうことはありますねということで、ぜひフィードバックされて、文科省を引き込んでいく1つのステップにしたらい。
- リーダーシップを今後どういうふうに構想するのか。